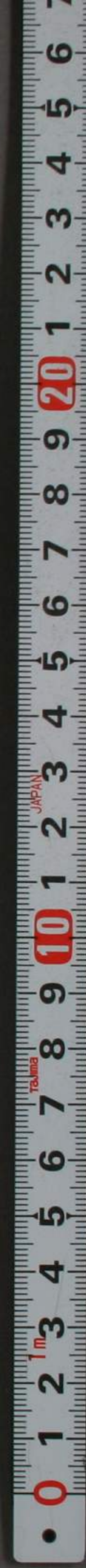




重修真書太閤記

九編

三



へ18 特
門 459
巻 83

消印
福張

重修真書太閤記九編卷之七

柴田三左衛門尉討死の事

并毛受勝助忠誠の事

去程うろむと越前えちぜんの諸侍しよじ義よとれのひ恥はぢと知し再度またのり返かへ
して戦いくさと挑いぢむといへとも北國きたくに勢運せうんの極たぎまるる所ところ小
や鷲見しゆみ兄弟あにの原彦次はらひこじ郎らうと共とも先登せんとうして必死かならずの勳いさ
さけりる加藤かとう席せき之助のすけ小突崩つとみされれ剩あま兄弟あに共とも戦死いくさ
し長井五郎ながいごらう左衛門ざゑもん青木あおき勘七かんとしち平野ひらの權平ごんぺい射落や
し淺見但馬守あさみづまもりの福嶋ふくしま市松いちまつ討うと原勘はらかんと兵衛べゑ神部かむべ兵
左衛門ざゑもんの粕屋くすや助すけ右衛門ゑもん小突落つとみされれ亂軍らんぐん小戦死いくさ

同攻
會印

大岡巴乙編卷二

毛谷新内豊嶋猪兵衛とよしまハ加藤孫六片桐助作かとうまろく両人ハ
逢あて討死う柴田權六しばたけんろくハ片桐助作かたこうすけハ揉も立たらして大おま
敗走さいそう一佐久間玄蕃さくまげんハ爰こゝと先途せんじゆと戦いくひげるら脇わき
坂さか甚内しんない切崩きりくだされ手ての者もの大形おほがた打死うげるらり
又賤岳せんがく向むかて軍いくさをとるこも叶かならず柴田三左衛門尉しばたさぶ
後のち又またあると幸さい命いのちを限かぎらずと戦いくひけるらとも終つい小敗せう
軍いくさと立直たてとへと勢いきほもなく落お行くだけると見みて脇坂わきさかハ
と追掛お此競こゝろ勝家かつやの本陣ほんじんハ攻せめらるら
と猛希まうき驚龍きやうりゆうの勢いきほを振ふるひ曳ひ々々聲こゑを出だして進しんみけ
るら佐久間さくま手てハあまててひの敗軍さいぐんハ士卒しそ氣きを屈く
力ちからを落おして逃にげるらり有様ありさまも見み苦く見み

えたりけり加藤虎之助清正かたもとらハ生篠なましろのさし物ものハ
勇ゆうをとりて敵てきと追攻お首くびと取とりてハ突伏つせき突倒つたう
阿修羅王あしゅらおうの荒あたるら如ごとくハ駈廻かけまわりけるら既すでハ夜明よあけ
の頃ころあれハ笹ささの葉はハ朝日あさひの光ひかりを受うて誠まことハささらさ
見みえがるら敵てきハあれを怖おそとてあまりと
と叫こゝろひ味方みかたハあれを羨うらやみてその武功ぶくわうとあまりと
清正せいせいあれを聞きたハ殘念ざんねん如是人ごとくはひとハ逃にげられてハ
能敵よ逢あうこ仕様しやうハあまりとて笹ささのさしの
のどめのどめハ兜かぶとを脱だて陣笠ちんかさ著き雑兵ざつべいの体ていハ出立しゅつだて敵てき
陣ちんへ紛まれ入いらんとしつとも七尺しちせき有あ余りの大兵たいへいハ
れハ勿な々々めめささらら見みへしとりめ

清正の陣笠或家の藏入現存と徑一尺三寸高さ
も同一く一尺三寸牛革を以てあれと製し上下
み布と張りあれと黒漆をぬり其上に金箔を
以て蛇の目と畫く徑七寸あり

柴田三左衛門尉陣に玄蕃元と余程隔たりし
三左衛門尉あのみ様我今の柴田と名乗とも玄蕃
元の弟なるもの誰々も知らう然して今日の敗軍
の兄玄蕃元自ら取らば災を何よ向ても恥辱を
我その弟なる花々敷軍とて兄の恥と雪むべし
とおのひしうの打残れ軍兵三百計ありける
と前後左右よ立て馬と躍らるを上方勢の勝りし

つる中へ颯と切て入豎横十文字入りけ破りて幾
度となく馳て突掛て打有様實に鬼神と取
ひしく目覺くも又勇ましく然ハ三左衛門
尉今と限りとおのひ切し我打取て高名よせん
と進みける中よ渡邊勘兵衛生年廿二歳二間の白
と切裂の大さしめめさし鞭と鐙と合せて馳來り
柴田三左衛門尉と見たり後と見るとこの拙さ
とおめさ叫んで切合ける柴田軍兵百騎討と
ハ渡邊方よも五十餘人うと剩勘兵衛も薄手五
ヶ處負て引退ハ柴田も手負て引返し互に
休息しこと云て立上り追つ返し討合ける

柴田う手の者七拾余騎のつとも必死と覺悟し
る上あまの上方勢雲霞の如く勝るこりつる中へ
無二無三ふ切入しうの歩し白けて見へたりけり
柴田うげ抜て我勢と見よの五十余騎の討てて
つりよ廿余騎をそありよけり此勢よても打破て
落へ落へりりしとも一足も引しと競ひめりる
処へ加藤清正歩行立ふあり雑兵よまされて走り
來り勝政を見て天晴能敵あり討取んと進み近つ
くと三左衛門尉さつと見て姿の雑兵足輕ふれと
も勢高く抜群ありめり曲者多くわりと聞は是
そ正しく虎之助ありへし形と替てりりるるこみ

そ悪うしげと勢たりしとも鎗の徹らぬといふも
あしし足長く疾とも馬よのあとり及ふつさのい
一鎗よとあめひしうの横よ一振打あるや否真向
目うげてるつしと突清正ひらりと身よめををい
柴田う鎗先尤よ反てりしへなる岩よ當りて火花
を散て清正莞尔と打笑ひ柴田殿と見るのひり目
うを程よとせあふありとあさ笑つし長柄の鎗を
取直し一を繰とぬとの誤を柴田う助をこよと突
貫ぬく痛手あれいをこよもたまり馬より真逆
ふ落る處よ走寄首打落して引返をめけてのち玄
蕃り配りし七手の者とも追々よ打死しけるをみ

て盛政今い見追なりとわのひ切閑道より恐ひて
筑前守の本陣へ馳入筑前守と目と目と見合せる
計又近よりしうとも筑前守の氣力烈しく勢猛け
しの手と空しく引返し味方とみど散々敗北
し今い勿々盛うへとと方便もあし權六勝久う
手のいうよと見こさる敵強くし勝久も危ふ
く見こびるふり盛政あれと救えんと真一文字
馳うしう當ると幸例の金さし棒のて打倒し突
倒しあしけし敵もその怪力し目を驚うし肝を
消右と左へ散亂し盛政のしとけ抜て我身と見
しの大童鬼いこてし打落され鎧の袖も切落され

草摺もりこししよあうつしとてい爰よと切死し死
とやとて又敵陣へ走り入の敵も玄蕃えと見知て
近付ののあく只遠巻と取巻たり盛政あつてし思
ふ様うてい能敵よあへりしし雑兵共の手よ死
せんも云甲斐あしつて打破て落へさめのとと獨
言し近付雑兵四五人と一所し寄合手と手で取て
捨ふを又い蹴倒し踏躑りあししうの恐とて近付
ののあし佐久間此体と見をすし上帯切て鎧を脱
小手臈當と取対し雑兵の笠と著し權六打つと懸
の道とたとりつ猶山深く恐ひけり軍散しとそ
のしち見とい賤岳の死人よと谷と埋し道と塞と

鬼火夜々の暗と照し實よののどづく見へり
や爰に修理進勝家の本城越前足羽郡北庄ハ普請
中あれハ勝家の從弟柴田彌右衛門并に兒嶋若狹
守よ三千餘騎の軍兵と添てのれと守らる其身ハ
毛受勝助同久右衛門松原甚五兵衛中村與右衛門
等先と近習馬廻り七千餘騎と率し後陣の勢
二万餘人あれとも佐久間討負し後入落一人落とふ
りく近支度とのとあけりるより本陣多勢あれ
この踏直にへるよあは筑前守との機とくろり
とくや越前勢と打破るんと時刻到來をり進め
と下知しあへ承りひといふへとそのまゝ金

の瓢箪の馬印とあり立し旗本衆と繰出しあへ
ハ是で見るとり葛蒲谷の堀久太郎賤岳の栗山修
理亮羽田長門守堂木山の蜂須賀彦右衛門同一尾
崎の羽柴美濃守木村小隼人田上山の高山右近大
夫との外若々の大将達小川神子田等の歴々の
とも木戸と関と鯨波と作り貝と吹鐘とありと
弓鉄炮と先と進め鐘先ととろく突出ける有様
ののまたとて類を取り嵐の木葉をさそふり如
く又ハ夕立の雲の雨をわくるよとも似たり石と
碎さ砂と飛くと馳出けり山谷も一度鳴動し
るよとさまり見へけるよりさのよ猛と越

前勢一支部も支のあを親をこそ子とめりりら主
や放と従を失ひ我先よと柳ヶ瀬さして逃たりけ
と上方勢ハ案内者あり七里半の山中の迫りくふ
路と塞と勢と分て追ひるふらう難くふ行め
り詮方なく心々討死とするものも多りりけり勝
家玄蕃と見繼んと狐塚まで出張し東野の砦を押
えて居たる處は三左衛門尉ハ討死し玄蕃も權
六も行方知ると聞えりハ勝家左右と見返り年
來の好ととそれある今ま付副ある面々の志
のふともあも嬉しくひそめ但勝家十三歳の時初
陣し五十七歳の今歳まで大小の軍ふ會と七十餘

度のまゝ一度も不覺と取ひ然るふ今日猿冠者の
ため追つめし如是見苦鋪敗北に及ぶと全く
以て戦の拙さ非は是天の勝家を亡りある時
日の到るとおのへ更は口惜とも存を以て因
て潔く筑前守は掛向ひ一戦し面々の忠義を報
ひ申へさよといと云やうく馬引をてゆりりと
打のり既は馳出んとする處へ水野小右衛門の使
馳來り味方敗走し敵間近く慕ひ來りハ早々御陣
と御引然るへといと申けるまより勝家のいふ氣
と勵まし討出て味方とれば今追七千餘有けるも大形落て
とつらふ二千計はありけりあの勢ともさうい

つとも氣とおと一カ疲して勇まじく唯落んと
見合ける中よ毛受勝助家照只一人進て出今日の
体勿々爰よて一合戦もあるやうく早々北庄へ
夜をふめて引返しあふくく憚多さ申条よゆへ
とも御馬印と御姓名と勝助申預う此處よて一
戦仕るくく早々御忍ひゆへと諫めしうとも勝
家更に聞も入を

柴田勝家賤岳と退軍

并毛受勝助兄弟勇戦の事

勝助うさぬて申様大将あつて一戦あつて雑
兵の手よめくをあらんとうくあつても口惜く

近く明智光秀よても御覧ゆへ山崎の退口遅くゆ
よより小栗栖よて地下人共の手より身と果
し齋藤内藏助う諫よ付て早く龜山ヶ坂本よ落
行心閑よ一戦し其上よてもりくもなりゆ
其身の骸よも埋し終を敵よ探し出されぬ様よも
あつて一さこれい無跡よて敵よのものとあつて
とゆへさう大塔宮の御名字と村上彦四郎よ御
ゆる有て終よ大功を立ぬゆよ非きぬといさ
めら勝家涙とあり夫いさるさあとも左程
の志あるののを見とて獨立退ハ大将の本意あ
らばともかとも其方と一所よありあまよといひける

と聞て勝助もも云甲斐あくおこしあひりか木
曾との今井と一所にあつて思われりあま
り敵の首を取とむひり我も人もいつまたり
長生いへさ僅の別とわしきまをひて見苦敷死と
あつて口惜さ早々といわれて勝家も道
理に折さるゝ其方心のまゝ計らへゆとて御幣
の馬印と今まを著たりける具足と脱て勝助と與
へ勝助う鎧と勝家著り泣々主従引りさげり心
の内そやるをある勝助の勝家の鎧と著り金の御
幣の馬印とれり立意氣揚々と大方あつりと拂て
見へまげり敵とて近づきしうの勝助弟庄兵衛

と呼居我と兄の久左衛門殿とい爰すて敵を待付
一戦とへり其方へ匠作の御供へ北庄へ引返り
御先途と見繼申へりと云げると聞て庄兵衛遅遠
いあつとも同一く死を命あり御心の儘に働さ
るへとのひあつて勝家と添て引返を勝助勝家の
うらゝ陰を見送りける次第遠さうり今漸
見へるあつて時兄の久左衛門と申様この処の場
廣くと大敵を待よるうらゝ茶白山の麓の路
狭くして便宜もろりいさやうと移りへりと
て十餘町引退と今まを世上鬼と呼と柴田う
金の御幣とさめり寄來る敵を待りけり又

勝家の勝助の名残とわしこりとも果しかげと
へ庄兵衛より引立られ泪と共に引分北の庄をさ
しと落しけり筑前守の賤岳を馳下し諸将も向て
下知しけり敵敗軍しこれ窮寇のたのひをか
そなうらん然は是を追とも長追をくうくは是より
先の山間の谷狭く難所多し勝家ささう老功のの
のなり是道筋は備あけいあまへうくは軍は十分
勝たると軍と持とい誠は難さののりあるを狭さ処
は敵と見い貝と吹て勢と縮めは廣さ処は敵と見は
大鼓と打て氣と張は是よりしては上帯よくしり馬
の腹帯とよめろをい兜をい采と取よて着こあり

とと事細々と告られて案内者とい御先ふ立龍の
雲と起し席の風も從ふ景色して天正十年癸未
四月廿一日辰の刻打立る此日一天晴て曇あく少
し暑こと催ふしけり敵味方の手負死人算を亂
しとありけり筑前守見あひて死たるものい是
非もやし手負い無し一日は照されてつらめ
向の岡の木の本よ雲霞の如き見物人の笠をうり
て手負よ着をよ褒美の後よ沙汰をへしと下知し
けりよと聞人とい筑前守の行届きたる心の内を
感しけり然筑前守鞍の上よ立上り四方を見廻し
勝家をとてよ落たりと見ゆ餘りよ早と退口心元か

ここありうちと追懸て見よる若めの共と采配を
揚あへ近習の面々我先うと駈出し見よる茶白
山のあるは柴田う金の御幣の馬印ありたて其
勢千騎あり見へ其外は勢と伏へる處も
見へばと注進は其時筑前守然ありて柴田修理進
難所は備へて敵を待と覺えられ容易はかりて過
るふといひありて淺野蜂須賀一柳等の並居り
たて見廻しありて兜の緒と志あり直しありて
とも一同は兜の緒と強くしめびつと見ありて
ふも大事の軍ありて心を天音聲は宣ふを
聞て勝家ありての勢を備えしと聞ありて大

事大事と宣ふとありて心得は我討取て高名よとん
と勇やぬののを無うけむりて筑前守よといひ
めれと下知ありて丹羽五郎左衛門尉堀久太郎
木村小隼人鈴木筒井以下二万餘人一同ありて
たり此時勝助家照は楯の面よ立顯られ奇ありて誰
表裏のの丹羽五郎左衛門尉大臆病の堀久太郎
さてい日和見の筒井法印ありて北陸道の管領
柴田修理進勝家ありて我とおのこんの疾々よ
とやと呼ありていとい鬼柴田ありて討取て御
感し顔うらんと真先よ木下半右衛門六千余人鋒
とそろへて切てめくる勝助久左衛門只二人一所

打寄先よ下雑兵の諸膝薙て薙倒し少色ゆく
處と見をゆり五百余人真黒よなりて走りゆき
へ木下り六千余人立足もゆり切まくられ後又扣
えし筒井り備へ崩りたる勝助兄弟あれとへちと
も目よりけを猶も手痛く働くと見て木下半右衛
門汚穢めの振舞や柴田とて鬼神よあはれい
てゆくと言つ進むと見て勝助大腹を立人も
多さよ汝等う我よ向ふとの悪さよ只一薙よと大
長刀を打ありく勝家り死ぬの狂ひ木下半右衛門
をひふ退とと呼り走りて薙立よへ半右
衛門り膝の頭より太股まで鋒上りよと切り割と深

手あれハ馬よもたまりひとふと落ると郎等とも
ゆけより肩よりけて引退く勝助あれとて主人
よとむり天罰見るとあはれ笑ひ誰よても早う
ゆきと扇開てさし招ひハ小川土佐守と名乗て馳
あくる勝助是を見て小川土佐守り其方ハ佐々木
六角の家人よて在ありう主と棄て織田殿よ従ひ
又明智光秀よ一味今ま筑前守よ従ふとよ能
も主従の義理を知ぬのうか柴田勝家り最期の
供よと汝り背さし大将達よ申訳をよと取め
ゆきハ小川土佐守よのち勝家めをこと引か己う
しや首切て呉んと進むと見て討とふ續け

續けぬと七百余人真しく馳つて勝助兄弟
元より命に塵をまきりも軽く義へ大山より猶重
と思ひ定めしとあれに相従ふ千余騎多う討と
て僅に三百余騎より引うとも物のうとをを
踏越く切結ひ又さ違つて戦死を小川土佐守
言うひあく切あつらま五六町り追崩された
り勝助兄弟のうりもしく筑前守の旗本へ切入を
やと進みけるを丹羽五郎左衛門より迎てさるを
し生捕よとんと取巻さなり勝助兄弟三百余騎を
前後左右よたててあれと駈破り木の根に腰かけ
兵糧取出し緩々とこれを遣ひ又立上り蚊手く

あひ十文字ふりけ破りうけ通とハ丹羽り手の者
のてあまし左右へさつと引分と中と開て通しけ
り半時とらりの合戦に敵も味方も爰よ多く討
とけるものり修理進ハ追手の難い越前國へ合
甫菴本太閤記に其道を得たる勝家あれに尤ありとて
五幣と取て勝助よこころ心も有めのの毛受と與とよ
と云とて諸鎧を合と退しなり勝助五幣と請取我手
のめの三百余人其外勝家の小姓馬廻り少々左右は従へ
原彦次郎居たり要害幸に明し是に取入老母
妻子共く形見の物と旧好の者よ渡し遣りけ
つりて盃を出し樽あま取ちり夫々といひ時皆

土器をとりて酌たりけり追行兵共柴田馬しり
 と見是は修理進めを扣へたれりしついでをぬと追
 行勢を制し止むるも過半をり又勝家打とり名を
 天下に揚んとけりしむも有てひさしくと取巻し處
 は勝助名乗ける天下よりいふもあはれ鬼柴田とい
 へりし我はうととあはれと拂て突て出ひし二
 町あはれしつと開とるるるめくる處は兄の毛受茂左
 衛門尉一所討死をんと云ひるを勝助佐藤兄弟の
 例を引老母のめりしと諫めし共茂左衛門聞入を
 能戦て一所腹を切とあり
 重修真書太閤記九編卷之七終

重修真書書太閤記九編卷之八

嶋龙近毛受勝助を討事

并前田利家柴田羽柴両将江對面の事
 去程は丹羽五郎左衛門尉長秀の一軍大に亂し
 うへ二軍の物頭江口三郎左衛門溝口金右衛門村
 上次郎左衛門あとし初めとて千餘人足とため
 さそしと駈寄たり勝助家照へ討殘され侍共を
 とげやし兄の久右衛門と共に面も振を戦ひける
 りと鐘の突折太刀ハ筋の如くありたるゆ
 のゆめともをば爰は顯られしこふ隠し手痛

く働さける中あも毛受久右衛門尉丹羽う二陣の
物頭村上次郎右衛門と鐘を合と死生知と突合
ける久右衛門尉のりより仕けん村上り鐘を請
損し高股を去るう突と倒る處を次郎右衛門
うの寄て首を取勝助られと見るより兄の讎と走
寄の手の者五十餘人一つありて切うる村上
をて疲とさるち息繼んと引退の溝口江口
入替りて是非と討んと進むり勝助味方とめ
り見とへ又廿餘人の討死し残るいらつる十三
人のつとも總身赤と染兜の打落され具足ぐそくの袖草
摺り切落され深手浅手負ぬめのもあくされとも

心へ金鉄に似て一足も引し引あと諫めつとめ
ら枯木の如と手足と太刀鐘長刀と握て敵と
さつと血眼ありて進むると四陣と扣えし
筒井順慶島龙近と向ひ今日の備場ありてい
やと花々敷軍をたたく軍令との背く共先と進
て一戦し柴田と我手と討ちつとあゆみその
心をよと下知しけしと龍近聞て窮巖りへりて猫
とうむとつへり敵少ふりと是と侮とつへり必大
敗と取へしつとよ能ありて敵を勞らし
その勞とさるよ乗して是と討へ全く大功と成し
つへしとされの四段めと備えし処却てありしと場

所と覺之ゆ因て某も先刻より軍の進退を考罷在
ゆ然るも柴田より為味方多く切靡けられゆ今ハ
能程と覺之ゆと云て軍兵を繰出しけるを見て勝
助立上り今寄來るの筒井り勢あるり真先は進
しハ鳴龍近とおぶゆると敵も敵よりるゆのゆ
ゆれハ幼稚より大和國ハ在て度々手柄を顯
つるゆのと聞是ゆと我ゆゆの仇あゆ尋常ハ馳向
へやと呼り棄て打殘され侍とゆと前後ハ立
大音聲ハ是ハ柴田修理進勝家より我とおゆゆん
ゆゆのあゆゆ近付より我首と取高名ゆゆゆ思
賞ゆゆゆゆゆゆと名乗ゆゆ真暮ハ駈けるを見て尤

近も駒をうけ居日本國ハ聞ゆ渡りてゆ鬼柴田殿
の御振舞とも見請申されゆ但御馬印よりゆ御
物具ハ柴田殿の御あるゆゆ柴田殿ハ今年六十
ハ近ハ御齡あるゆゆ只今修理進ゆゆと名乗ゆゆハ
三十未滿の若人なりゆゆてハ匠作を落ゆゆとん為
ゆ誰人ハ假ハ修理進殿と申ゆゆこのゆけけゆゆ
天晴漢土の紀信我朝の佐藤忠信村上彦四郎ゆゆ
ゆゆゆゆゆゆ某ゆゆゆハ大和國の住人筒井り家の侍
ハ鳴龍近ゆゆゆゆゆ大忠臣の御首賜り申ゆゆ
ゆゆゆと大音聲ハ呼りゆゆ馳寄ハ勝助二言と
ゆゆゆハ大長刀と水車ハ廻ゆゆゆゆ掛る龍近

あれを見て長刀の我も持たり然いふとまて参り
ゆくと云つて秀吉より賜りし白柄の長刀を
執て立向へし勝助も上段下段拂へし突つげの掛
つ雷光石火いささけりともさ間も見へさうけり勝助
開いて掛しは九近かうして付て入一往一來虎鬪
入奮迅獅子互得とる秘術をつくり合はれをされてい
や組んと長刀投をせりけ向ふおふと答て無手と
組馬と馬との問へ落重うて揉合げらる九近終
り組勝押えて首と搔落し勝助今年廿九歳あれを
見て毛受り手の侍とも一人も残らば討死は木下

半右衛門小川土佐守丹羽五郎左衛門尉らに最
初より勝助と戦ひつととも何も切負けるは筒井
へ四陣を備えし故終り勝助を打取けりめ筒井
勢一陣のめりあは木下小川と同一く切負へさ
し四陣よりしりし運のゆとあを不思議あれや修
理進勝助より引別と馬をくらめけるは廿一日の八
過るころ柳ヶ瀬より十三里越前國府中城に馳付
たり城主前田又左衛門尉利家より柴田より筑前守
より打負て爰より落来りし由と聞て速より出
てあれを迎入書院に請ひ此程の弓矢の作法更に
透間あり覺えし玄蕃えう中入して中川頼兵衛を

討捕と武邊といひ手柄申計ありその時速引
入いらくとあやしめさるべくいへとも軍ハ左様
あるやうくくゆへ但玄蕃元ハ何とあるといひ
其後の消息を聞とい若や戦死のさされいり一入
残り多く覺いといこれて勝家も大よあるこひ又
左衛門尉殿の懇志の程世よも忘とくく存い玄
蕃元中入の圖ふ當り急よ引上い事あり夫
ありて如斯のろく打負たりと申ののも有之へく
夫等ハ軍の道を知ぬのの共ふい勝も負も天の時
よあるのの何とく人ノ力よあれを防と申へ
と玄蕃元并よ愚息權六事今よその始末を存と

必定戦死と事と存いをめでい若さめの相應の
意と喜ひ入てい抑又左衛門尉殿ハ年若さころよ
う筑前とい別懇よあこよ某りく成果い上
い御心置なく筑前方へ御申入いて本領を安堵
いよへとよてい更よ以て恨うましく存と
よの其上筑前ハ知とあふ如く物と早く埒明い生
管なり追付是へ寄來りいア早々御使と以て仰
入らと然るへくゆと申けいハ又左衛門尉通作よ
向い御老練の弓矢取とてまを共とれ追ま
いりてと推量りい処案外なる御説と承りいり
よも筑前いよ藤吉郎と申て故殿の御草履取い

頃より存知ていへは是へ寄來りい共亂妨あとい
 決して致さずい存い尤さい緩々と御休息あとい
 逢人共更思ひ圖のさつさい事いさつさ一度
 計りいこの裏さつさい軍中入を誤りいのさ
 らいゆめいさい某う運い傾さ命い且夕いさつさ
 いと覺えい又左衛門尉殿い織田殿の御子孫の御
 後見さつさい天下を補佐いあつさい又左衛
 門尉殿左様いあつさいん程い筑前守も公達の
 御為いあつさいいさつさい某今曉より事

多くい實い空腹いさつさいたり湯漬給らつさんと望
 申いさい利家承らつさ安さつさいゆとて湯漬飯い肴
 取さつさ瓶子を出さつさい勝家心さつさ引受
 酒のさつさ終り湯漬喰心静い立出いさつさ利家見送り
 可申とて立出らつさい勝家うさつさ止め却て
 御為いさつさいと辭い申さつさ初とみ又左衛
 門尉も城門の外い送らつさ互い手を取て別をい
 ちの東西へ引らつさいさつさい

甫菴本太閤記い勝家府中の城いさつさ前田父
 子對面い此中苦勞の一禮熟いのへつさ極運の
 さつさい遇ていさつさの如くの次第更い言葉もあつさ

しまたは急湯漬を出されゆて心静し
食つうとさる馬と所望いそとあへり利家
も送りゆとんと立出らしと辭し歸ゆゆけ
り又喚返し其方へ筑前守と前よ入魂他異
なりうあへり今度の誓約をひるめへ安堵を
らゆゆて言捨てりゆゆり

鳴龍近の柴田と名乗し侍と打取筑前守の本陣へ罷
越筒井順慶の家臣鳴龍近柴田勝家と名乗し
のと打捕り見ゆへ年齢より更修理進
へ似る但鎧物具以下馬印みりて勝家の平
常のこをゆゆの相違ありゆと申立りゆ筑前

守その首を見む真偽の知を勝家と呼ゆゆゆ
り普通の首と准りゆゆゆ供饗を尋出
その上よ居て實檢の式を行ひ勝関を上龍近を褒
美しそのち筑前守申されけるは是の柴田家臣
毛受勝助り首なり主を延さん為よ伐りて死しつ
る氣あけあさ然の修理進へ延しゆゆゆ追りけ
るゆゆ急さあゆゆゆ柳ヶ瀬あり八里を馳て
越前國今庄ゆゆゆ日既黄昏よ及ひゆゆ
へあゆゆ一宿ありゆ人馬の息を休め翌廿二日未
明よ府中の城に到り見あへり城門を閉静まりり
ゆゆて居けるゆゆ加藤虎之助只一人召連大手

の門で打扣と大音よ又龙く〜と呼らりあひ〜か
とよ又左衛門尉只一人立出面目もあつた次弟あひ
追付切腹の〜とく〜と申され〜と聞あひそれ
の余所〜とそ入城あり書院よ入て柴田を暇
明次弟又龙と共よ天下と補佐申〜但今不と
空腹なり湯漬あつた〜と望すれ〜あつたけよ
あ〜め〜其夜の府中の脇本よ止宿あり

後藤又兵衛尉佐久間玄蕃元柴田權六虜る事

并北庄籠城の事

此時黒田官兵衛尉孝高の後藤又兵衛尉計策よ
り賤ヶ岳の城と持こ〜玄蕃元と欺と勝り

た軍よ勝〜とものよ〜然る〜敵一人を討
と残念極〜と牙と突て居〜りけ〜と見て又
兵衛進〜出今日諸手の〜とも相應よ稼とつ〜と
も當手の獲物あ〜故よ深く憤りあ〜めとと覺
え〜併又兵衛存〜る旨のゆそれと御守りゆ〜ら
莫大の御手柄ある〜と申よ〜官兵衛父子
熟あ〜と聞何様其方の申旨よ從あ〜ゆ〜と
やと問其時又兵衛申様御勢をい此處よ止め置馬
武者三十騎〜某よ續と〜と云と〜真先
よ立元〜智謀逞〜と又兵衛〜様あ〜と有へ
けと跡よ續く然るよ又兵衛此處〜り敦賀へ通

ふ山中の細道とたるとく谷あうく進まけるよ
よりある何處へ行と加様ある山路へうりて何
事のなるへとぞ其方よあさむりきたり又兵衛い
ういよこの如是のころとあそとゆと恨まける
聞又兵衛のやく今をこ辛抱とまやうく能得
物あるへと云つ猶山深く進ま行やうて少
打開したる谷間の草深と藪を求めのこまの
人よ兵糧つくりを足場をこりて休息をむむ三
十騎の侍共いりよ又兵衛うりて山路の谷うけ
敵とあつとの何事とや諸手の侍へ越前路をこ
て敵を追うひつとこの涯の忠と盡しつとまの

つと能敵と討つるよ我等へその方よたよこれの
ゆりある山中よ來りつとこの敵いあうり兎一足見
出ん様もなありあう腹立ゆとのよ又兵衛あさ笑ひ
やうて骨を折とへ腹のつりて其詮は能々
糧をやあへよと云て取あてねの何もおのよ
まうよまうとめ木の根をまうりよ居眠り居た
る時又兵衛めこの松の樹を荒々う打との音
よ驚ら面々立上り又兵衛何事とをるとのよ時
又兵衛聲を替めあさを見よあの谷道と傳來る
のと誰と見先よ立よ柴田權六よその跡ある
へ佐久間玄蕃えうりよ敵まのあうと云

ハ三十餘人の侍とも俄つひよのささきとて敵あそ
出来りのとと手毎小鎗長刀もとひしめく時又
兵衛お静しずめ申様のとや兩人とも此處へ来る
より対ふ道もなり音かたきとといひささき待と
いささきと玄蕃先權六を伴ひ敦賀をささきと落来る
然とも落人のとなれハ飢疲とて歩行もおのり様
なりハ一歩のそと一歩のひりハ山中の清水ふ
咽をうるや山末の實を取て氣と養ひ是より敦
賀への程近ちかしうの玄蕃九領知なり到着
なり又一計もあるアとあのみをりや力とて
落来るけると後藤又兵衛見るより母里太兵衛管

六之助兩人ふらゆとさし圖しとけきハ兩人と
う出佐久間玄蕃元殿たしう見知ていと云あ
ら左右より組付しうの玄蕃元人違へなりと云つ
川二人と共に捻ねぢあひひびきと見て黒田三左衛門後
より足を取て引倒ひたを玄蕃ハ既すでに飢つとてさ
りハ揉合もみあしうとも終ついりふら引伏ひそられ手取
足取繩なわをくる其間そのまに後藤ハ權六を取とくめ
この同おなく繩をうけ本陣へ連行つらひさハ官兵衛父
子大に悦よろこひ味方諸將しよしやうのつとも高名と顯あるとい
へとも打取うり首皆侍品くびののり然しかるに我手よ
ハ大将を二人もて生捕なましと抜群ぬの手柄といふへ

大陰記九編卷八

是全く又兵衛智謀のいふ處なりと大悦
ひまの黒田の陣より早馬を以て筑前守の陣處へ
注進したるに筑前守大に悦喜ありて黒田父
子と厚く賞美しむひ直に佐久間兄弟と筑前守の
方へ請取らば山口勘兵衛副田甚左衛門預けを
ひまの料理を出され次に行水を賄ふれ懇まの
てなりしむひなりぬも越前北庄の普請中なりけ
る所へ勝家帰城ありけむ柴田彌右衛門尉兒嶋
若狭守中村文荷齋徳庵中村與左衛門松平甚五兵
衛等勝家を待迎へさても此度の敗軍是非不及
に急に籠城ありて然るへいと二三の九の人数配

の形の如くなり得られとも惣構まりの軍兵引た
らば然るに廿二日の晝過ぎ頃筑前守の先手堀
久太郎北庄へ押寄來り五ヶ条の掟を定め廿三日
の未明より城下を放火し備を立るとの跡へ上方
勢追々寄來り城を取巻一度は火を掛て燒立ける
その煙の中へ筑前守押來り本丸に向て竹束を配
り仕寄を付さるとその身に愛宿山へ押上りて陣を
取城中より堀際より寄たる軍兵と浴び打
打取さるる返つて扣たり筑前守此体を見て柴
田もさばり名譽の弓矢取りか諸侍多く柳ヶ瀬
て討死し又へ敗北し籠城の兵士のくらくもなり

然るに此大軍とありとも怖と丈夫と籠うしへ實よ
名譽の大將うか悔うと誤とふと云うちり勝家追
手の門を押開き堀り備へ突つてめくる堀の元より
軍と大事よ持けし柴田の御幣の馬印をみるに
のくともこの怖る色とも見と筑前守の下
知を守り大事くことありらふると柴田くを
も突通り搦手よ向ひし来山陣を切靡け景色を
みて勢をよめ城中へ引入げると見て長岡藤孝
入道筑前守よ向ひ柴田も今は是迄よい一命
と御助けありて蟄居とむつと申けし筑
前守頭をありいやく怖るることなりとのこれ

て更よ同心の氣色なり勝家城よ入文荷齋を呼寄
小書院よ信長公より拜領と一牧溪筆の踊り布袋
虚堂の讚無ふの花生大書院よ達磨左右龍帝無
準畫讚姨口の釜をめさり又大國と名付し茶入を
ハ文荷齋よ與へ我無らんのちよ是よと茶湯と
我よ飲をととのひし文荷齋請取よのこと笑
ひつて茶湯仕らんとひさ茶入を三度つて
るその後柱よ打付打碎て棄たりと勝家見て叔
ハ汝も供とるるといふれとや廿三日の午時
より筑前守の勢三木屋口より攻りて玄蕃允權
六兩人を大手の門よ連來り勝家よ最後の暇を申

さん為是追召具しひなりと呼をしうの柴田も櫓
み立ちあらしれきらし見つめて居たりけり敵の
為に捕られし武士の道なり更其方達の恥か
らば某も今日明日の内よ自害とへしといひを
くとのより櫓を下りしとあり

重修真書太閤記九編卷之八終

重修真書太閤記九編卷之九

三女子北の庄を出る事

并筒井順慶西度使節の事

去程に筑前守の計りて處少の違ふに修理進勝家
玄蕃元權六兩人を見しより鬼といふをてし心も碎
け一向に天運の然らむる処よりて戦の罪よわ
らば昔ハ三百の兵を率ひて二万三万の大敵を追
はひけ十三歳の初陣より五十七歳の今迄大小の
合戦数十度しうも薄手一川負しともひのりしゆ
のう二三万の兵を擁しあうり只一戦のあやま

あり終るあり至る世に不思議と云つて是
併天の勝家を亡し一時節到來と云て我を
北陸道の總管領の旗下の大名と云
へうは佐久間玄蕃元勇猛無雙なること唐士天竺
のいごらに我朝の誰り肩を並べんと然と
も後藤又兵衛如く欺むり終る生捕の恥を得
るに又兵衛の猛くして玄蕃の拙くして安部
宗任鎮西八郎為朝惡源太義平樋口次郎その外生
虜となり面縛の辱を受ると更に二人の罪を
ひ勝家も今日明朝の内は自害して其方共を待て
死手三途を越るう又其方共を待るう二川の

間を免れ但其方二人の行衛心元ありり
命の内は對面して最期を心安くせりと云捨て櫓
より飛下りそのちの音もは玄蕃元權六も勝
家對面せしと最期の喜ひ何事り是は過へけんや
是上の今生の望あり我等あり一刻も疾首を列ら
せしと申せし共筑前守さの急くとりいと
云て許されし元の如く山口勘兵衛副田甚左衛門
尉は預らしうの兩人を召具して後陣に入
爰は柴田修理進勝家いやりて奥の殿に入小谷の
方を近付て申ける様然我等は運の命終ら
んと且夕ふせられん御身は故殿の御妹ふ

あつしよをへ筑前守よも主君ふやうまはつらく
當り奉ることいふもあつしよ早出城あつしよをふやう
某ととも久しく相馴しと云ふもあつしよねいど有け
しハ小谷の御方あつしよのひもあつしよねいど承らる
めのおりか人も知つる如く江北の浅井り妻とつしよ
年頃よあつしよ子息もあつしよつる中と故殿の為よとつしよ
別らよ浅井と共に死を同しとつしよをさつしよと世上よ
弾指つしよつしよを心苦しくあつしよのひよと去年の九月
あつしよ爰よ迎えつしよつる身の今やと筑前守の方へ
出よ頼よと宣ふことの恨やとつしよのひつしよ懐刀を
引拔つしよとつしよと見えと勝家おつしよとつしよめ尤様

よ宣ふことよあも嬉しと存とつしよの去つしよ三人
の姫君ハ勝家り子よもあつしよハ是ハ長政の胤子ハ
あつしよ筑前守の主君の君達つしよ筑前守も疎畧よあ
つしよあつしよをめで生長たのつしよある御身を全くあつしよ
参らをとんと親々の本心つしよといひつしよ小谷の御
方も是とつしよの始つしよ如何よもつしよと助け申度と
あつしよのひつしよつることよとと富永新六奥村九郎次郎二人
と添て寄手の陣中へ出いけつしよへ筑前守富永奥村
と呼近付姫君たちの御上秀吉つしよつしよ如在よ存を
いひ此外よも女中たちの分いひつしよも御出いへ
と申遣つしよつしよつしよとも其後の出るめのもつしよ城

よそい富永奥村をもち迎え筑前守左様と申さう
つの子細ありと喜び廿三日の夜の酒樽おろく
取出し肴菓子役所へ配るのつとるも今世のた
のし今夜うさうなりとて酒宴とくめ取々ふ
吞つ唄ひの様々ふ舞狂ひいとも饒くく聞え
て其夜もや更さる頃中村文荷齋筒井順慶法
印の使者島左近松倉右近二人入來の由と披露し
けし勝家聞て筒井法印定めて玄蕃元腹切と
勝家剃髪深衣の姿となりて何どの寺院より住
居と權六の泉州伊賀の内を一國充行と
と云ふらん夫より外に使者の口状ありと云ふ

と云て打笑へ文荷齋使者に向ひ何事と問
使者二人とも匠作の御意の通り筑前いささう疎
意と存と御同心に於ては早々誓紙と進し申へ
いと呉々申付ていと云ふあり文荷齋勝家何と
おも鳴松倉御面會へと勧めけり勝家
天守を下り大廣間へ鳴松倉を請し勝家對面して
申ける様筒井殿年來の懇意と忘と云ふ使者節を
以て芳情と盡されし事今生後生忘と云く御
計ひの趣他人と取ては左もあつてい但勝家
り素性へ知食とくく最期形見語り申へ
勝家り祖父とていめのへ斯波一族の席と連ふ

りゆめのなうう織田家長臣の子となり父より
ののも同く家老の列なり勝家より故殿の重恩
より家の老して万事と執行ひゆる然ハ筑前守
り故殿の草履取たり始より木下藤吉郎となり
羽柴筑前守と立身一つるまで勝家より執申
行ひ猿面即より追攻誥られさして命惜くい髪
こりこちちてとい申す勝家一人同心あり
ハ法印御房の懇情も盛しく相成可申事何れと
氣の毒千万といへとも此条より勝家一人の恥か
らば父祖父の恥とい恥を知て以て侍といひ恥
とて恐るべくハ侍たる詮あるやうくい法印御

房を武士の胤よりいふはまさぬ面々のつと
も名譽の子孫なり此程の道理より迷ひぬや
こし使節として入城ありハ勝家何とり申それ
聞て一場の笑草よをそよとの本情り此酒も今宵
限りの酔心地あり一獻くむと云つ大盃よ
あしと受て鳴左近よこし又外の盃取て松倉よ
さしあつと顧みおれ昔の勝家ありハ引出物
もあをへいさと籠城して今ハとのよ時あり何事
も心よ任を以て此金子も今日ハ入用ありしと
しげきとも進むるなりとて兩人よ黄金三枚つ
與えその次よ是ハ随分勝家より秘藏とて処あれと

今へ何りせんとして鳴る貞宗の脇差松倉兼光の
小刀と與へけし二人とも涙をひつゝの
御定を蒙る誠は是非なく存ひ罷歸りて頓慶
ふ申入ひつゝいざと黄金并腰の者と請取て出
城し筒井よりくと告げし筒井もあくと涙をひ
をひ如何も道理至極あり返とてと辭あり去
り今一度城中に至り斯々いへゆとて二人は柳
廿荷鮮鯛廿尾の事を遣りけし勝家のふへと
詞へ先は申盡たり使者は對面その詮より柳并
ふ鮮鯛は城中ふ今初と之しこのより厚意悦ひ
入ひ生と替てのち報答申へくいとをて使者

と城戸より内へ入るとりや

甫菴本太閤記ふ三人の息女とへ出侍とて父
の菩提をも問を又自ら跡をも吊のどんり為そ
ういと宣へい最安の御事なりとて其由姫君に
申ささめふ好君のやとよ母上ともふ同道
ゆりんのものと啼りありとあふを父荷齋其
けでも聞入を御手と引立三人を出し奉りぬと
あり

籠城の人々の佐久間十藏十五歳是は去年の春前
田利家の塔となりし府中より此方へ歸りま
へと頻り申けると更聞入を父よとあらしま

以帶刀殿勝家^{そむ}背^{そむ}信長公^{うきさん}直參^{あつち}安土^{あつち}より喧
嘩^{けんわ}出^い相果^{あひ}むい^い幼稚^{わらわ}なる我等^{われら}と勝家^{かつか}厚^{あつち}く
不敏^{ふみん}と加^かえ所領^{しよりやう}も多く充行^{あつち}られ^い厚息^{あつち}を忘^{わす}れ
れ利家^{りか}とてを嬉^{うれ}しと思^{おも}ひあふ^いよ^いと云^いて聞^き入^いを
松浦^{まつら}九兵衛^{くべゑ}の玄蕃^{げんぱん}の内^{うち}より加賀^{かが}の金澤^{かねざわ}城^{じやう}を預^{あづか}る
もの者^{もの}より日頃^{ひごと}法華^{ほふわ}と信^{しん}ある上人^{じやうじん}と小庵^{せうあん}
居置^{いぢ}供養^{くやう}しける此^{こゝ}上人^{じやうじん}も同^{おな}く籠^{かご}られたり又
松浦^{まつら}り郎等^{らうどう}二人^{ふたり}あふ^いく從^{したが}へり松平^{まつら}市右衛門^{いちゑもん}り
賤岳^{せんがく}より手負^{てふせ}し父^{ちち}甚^お五兵衛^{ごべゑ}當城^{あたじやう}籠^{かご}ると聞^きて同
く籠^{かご}りけると勝家^{かつか}聞^きて其方^{そのほう}共^{とも}急^{いそ}に金澤^{かねざわ}へ相
越^こりの城^{じやう}と守^{まも}りいへとのさめり共更^{とも}聞^き入^いを

何^{なに}どの門^{かど}あり共御預^{ともごあづか}けいへと申^{まを}て扣^かえり溝口^{みぞぐち}
半九衛門^{はんくゑもん}あれい世^よ聞^きえ龜田^{かめだ}大隅^{おほぐも}り父^{ちち}あり玄
久^{ひさ}と云^いへ痛手^{いたで}負^おて歩行^{あふ}なりり^い故^{ゆゑ}勝家^{かつか}毎年^{まいねん}大
豆^{まめ}百表^{ひゃくへい}と與^あえて豆腐^{とうふ}と作^{つく}ら^いのなりける
來世^{らいぜ}迫^おも豆腐^{とうふ}と進^{すす}りゆるんと同^{おな}く籠^{かご}城^{じやう}を小
鳴新^{なるしん}五郎^{ごらう}十八^{じゅうはち}歳^{さい}病中^{びやうぢゆう}あれとも強^{つよ}く籠^{かご}り吉田^{きちだ}藤兵
衛^ゑり子^こ藤十郎^{とうじちらう}今年^{ことし}十九^{じゅうく}歳^{さい}祖母^{そぼ}や母^{はは}り止^とむとも聞^き
入^いを父^{ちち}と迎^{むか}え歸^{かへ}らんと云^いて籠^{かご}りけり大谷^{おほや}長右衛門^{ちやうゑもん}
門^{かど}あれ柴田^{しばた}彌右衛門^{やゑもん}り子^こなり母^{はは}并^{なら}兄弟^{けいだい}共^{とも}と
山中^{やまぢゆう}へ能^{あた}る^い送^{おく}りてその後^{のち}籠^{かご}城^{じやう}しける
父^{ちち}も大^{おほ}く悦^{よろこ}びぬ中村^{なかつむら}與次^{よじ}右衛門^{ゑもん}へ勝家^{かつか}と同一^{おな}郷^{きやう}

大岡記九編卷九

里小生長して名譽の射手なりと世よゆるされし
とのいり其外山口一露齋兒王上坂六炊助ハ右筆
なり若大夫ハ舞々あれとも天正十一年四月廿四
日の畑と共に自害して名と万代よとつめけり
甫菴本ハ大手の門の扉ハ小嶋若狹守ハ男新五
郎十八歳病氣よあり柳瀬表出張をさるなり只
今籠城し忠孝と全くと書付たりと見ゆ

勝家并小谷御方自害の事

并北國平均の事
出城ありける三人の姫君と申ハ織田殿の正しと

御姪あれハ上野众信包も同し續とありとて是
と預りありけり妙君ハおとつ殿永禄十二年己巳の
誕生よて今年ハ十五歳ありけり後ハ京極宰相高
次の室家とあり高次早世のち常光院と申是あ
り次ハおちや殿元龜元年庚午の誕生よて今年十
四歳のち筑前守の室家とて淀江御座ありハ
淀殿とも申ハ秀頼公の母堂よて大虞院と申次ハ
おの殿同三年壬申の誕生今年十二歳あり尾張
國大野の城主佐治與九郎一成りのとよめつと
奉りしう後ハ丹波の中納言秀勝ののたとふと
しよめつとありけり後城中よてハ柴田修理進

勝家のいさゝら酒のよとて浮世の隙を明るの雲
 と消んとして文荷齋とて有る名酒の樽と
 もあまの置あゝ種々の肴と出小谷の御方へ
 さしあへハ一二酌て又返さるりけるは匠作も
 数盃と傾け文荷齋ささる折しも夜半の鐘聲
 殿守の響ささる匠作小谷の方深闇に入あは彼
 四面楚顯の夜の夢楚王虞氏う深る恨もめくやと
 おのひ出さげり何も櫓々へ引さるるまんとされ
 いくや時鳥雲井の音信と別と催ふさるる小
 谷の御方
 さるるたす打ぬるあると夏の夜の別とさるる郭さるる

とわりげまの勝家

夏の夜のさるるあると夏の夜とさるる井とわけさるる郭さ
 中村文荷齋節義とあつとつと變をさるるのなれハ
 同一道と侍らんとて文荷齋
 其あはとさるる道とさるるひて後の世とさるるははほうへん
 おのさるる打連さるる行道のさるるや死かのお郭さ
 と詠けさるる匠作猛さ心もそれなれさるる見えと更
 小袖と濡されける小谷の御方其外りさるるの女
 房達念誦稱名の聲あはれとさるるめけり小嶋若狭
 守文荷齋殿守の下みこみ草とつと置るねての用
 意残る處もさるる置さるる心静と火とけ

半燃出ると及て雑人原と出づ叔勝家のおと
静に御沙汰かさをあへと申けり最期の
早く胸めと突立あへ勝家と女錯
あへり法名の自性院と云洛東養源院に靈牌と安
置せし御方み従ふ女房達三十餘人とも同一畑
立のり色の勝家の吉廣の刀を以て腹十文字に
搔切けると其あは文荷齋に錯しりへと刀に腹切
し時々炎々と燃上りける畑にむをひて死した
りけり近習外様の侍末々りけて五百余人のつと

もさ違ひくちりて自害とるその様取々あれ共
降人より出て出るの一人も抑柴田の清
和院天皇の源氏とて斯波の一族あれとも越後國
新發田に住しり新發田と名乗しり織田殿隨
一の功臣とて越後國六十七万石と領しけるも
天正十一年四月廿四日申刻に亡ひしをよけり爰に
上村六左衛門尉と云の經帷子着て籠城をしと
勝家さても頼りしと出立り然とも其方の末森
殿勝家のあはひ息女の先途を計らひしとあ
りし時のやそれの鬼もりとも成あへり某の何
の御門もとも固め申さんと達て望しりとも勝家

大岡記九編卷乙

是非りの人々と能く計らひひへ忠義第一たるへ
一と有るより涙と共に末森殿へ参りひこそを
あへとてあやしげなる乗物に二人の人々とのを
推の谷の方と志げり竹田とのふ處より
時北庄の殿守の燃上る烟を見て匠作御自害あり
一あらん北庄の烟たるらん見へていと申けり
末森殿心一つりは稱名にひひそのうち硯引を
今あるまのそちあまりの日乃うを紙を一時より下ぬるか
と記しあへい息女も同一硯を
あひひに竹田の里のまのを落しうへともいふまゝのめとい
そのうち六左衛門二人と人錯しあへり僧と請

しく菩提を沙汰しあへり煙となり其身も立
あへり腹を切て失しとうゆ此六左衛門へ勝家
と同一郷里に生じしものなるる戰場に供して度
度手柄と顯るるより上村と云名字をゆる
一二十石の地と知行をいめりあへり北庄落
城をいり筑前守入城ありて所々巡見しあひあ
へり長岡藤孝入道を見還り一首とありけり
この中て海の傍にすはるるまの里の所あり
と言下し申けるより筑前守その即智と感し大
に興しあひ廿五日より城中の掃除とさせ毛受勝
助り母并妻とめり出され厚く褒美ありて知行

多くとらふとあふそのら矢倉總堀あつと修復し人
 数と籠置堅固よと守らと廿六日加州へ出張
 あり五三日ハ滞留ありけるう前田又左衛門殿と
 呼出しあひ金澤の城よ石川河北兩郡と添て賜と
 う今日より羽柴筑前守と名乗あふへとやう氏
 と名と全く譲り與えあふと奇代の事といふへ
 五月朔日越前へ引返し丹羽五郎左衛門尉長秀今
 度一方あつぬ忠節ありとと越前若狭加州の内能
 美惠那二郡進退とるへといひ申渡され都合百
 万石より丹羽越前守よ任しあひて然るへといひ織
 さんやとたふといひといひ抑柴田丹羽ハ織

田家隨一の大臣より始つその一字を取て羽柴
 と名乗し筑前守との人々と指揮とるこゝろとく主
 従の如し不思議ありける事共あり同日江州坂
 本よ入中川淵之助秀重と修理大夫よあつと本領
 并よ加増感状と賜たり
 と涙と共に自筆し書て與えあひそのら賤岳近
 邊の神社佛閣と修理再建し百姓郷士等へそれ
 恩賞と與えあひ又不破彦三原彦次郎徳山五兵衛
 金森五郎八入道等降参しけるうの本領と安堵と
 とし初とよ佐々内藏助成政ハ始り柴田よ付と

大隆言九編卷九

るを以て太刀馬と送りて弥親と結ひ上枚景勝も
和親の使を立て音信と通し去る北國平均治
りよげり

重修真書太閤記九編卷之九終

